

蘇芳集

二月尽

青山

丈

セーターに腕を通すと日曜日
枯蓮を見てきた人の歩きかな
藪巻をされた樹へ行くだけのこと
お飾を真つ直ぐにして留守にする
成人の日の焼肉のけむりかな
鶏の居る探梅の村になる
丸葉を一つ失くして二月尽

良き音

吉田幸敏

海へ出てやつと煤逃らしくなる
初昔壺の中まで日が差して
年の朝この日ばかりの足袋羽織
どれもこれも良き音たつる二日かな
心眼に的さだまりぬ弓始
あれこれの我にて絶ゆる子日草
繭玉にすこしく昨夜のしめりかな
冬深し
我が影のありありと在る深雪晴
雪原に長いロープが張つてある
深皿や大皿や雪降り止まず
手が冷たくて水仙の群生す
薔薇垣にひとつ薔薇咲く冬深し
二番線ホームに立てば冬深し
目覚めては継ぎ足す眠り冬深し

小川美知子

人の息

木内憲子

一片の雲ゆく年の終りかな
三日はや常のこころの膝頭
なにとなく凍りて沼を狭めたる
雪中の紅椿とは特別な
こゑありとせば林中のしづり雪
人日の身ほとりにして人の息
息白く吐きて人間らしくをり

啄む

小島みつ如

葉牡丹を啄む野鳥つい追ひて
葉牡丹のひだに日と影喪の三日
半紙より文字のはみ出る筆始め
切絵はりの糊の手洗ふ梅ふむ
臘梅へ近づく風の匂ひをり
臘梅に佇む猫も足元に
寒月へ話かけては寝につきぬ

ピアフ聴く

清水裕子

風に覚め正月もはや七日かな
梅一枝生けしばらくを書に籠もり
毛糸編む心の傷を癒すかに
枯色に雀が走る影を連れ
ピアフ聴く茶房の卓に紅椿
桜おちば受け止めをりて躓けり
湯浴後に些事のいくつか冬の星

初鏡

下平直子

初富士や漣わたる風の冷
初西湖へ漕ぎ出す老の舟
淑気満つ銅光りの湖おもて
千年の夫婦神木初社
晩年の母に似てきし初鏡
医婦りの薬袋が鳴る寒日和
日脚のぶ菜の泥にほふ外流し

寒い椿

富田正吉

福詣

別府

優

言ひ負けて赤い椿を見にゆけり
父も子も寒い椿を見てゐたり
真昼間の時間を統ぶる椿かな
父と子が腕組んで見る椿かな
落椿さつさともまたせつせとも
くれなるの椿の道となりにけり
来し方も行く末もまた椿かな

窓

野路 斉子

遠くから見るだけの春窓あれば
学校へ行く蝶今日はゆかぬ蝶
老木の走り根やさし董咲く
食はず飲まず話さぬマスク梅むしろ
家出猫帰る春日の真只中
何か居て何かが揺らす崖椿
森と云ふ春夜一灯無きところ

行きあへばそのまま就いて福詣
しかと置く鏡開きの新聞紙
曳舟の波立ちしかと成人日
いきなりに金管鳴れる雪催
行き過ぎを退りて霜の深さかな
日ごと来て遊びきれない椿山
心がはりのやうな味して冬の梨

息熱き

前田 陶代子

大楠を仰ぎてよりの寒さかな
風折れの枝の切つ先久女の忌
早梅に近づく息をつつしめり
さざ波に消ゆるわが影風邪心地
波除けの濡れづめ春の来つつあり
明日を思ふマスクの中の息熱き
枯深しことば紡ぐに瞑りて